

がん専門薬剤師海外研修派遣事業報告

団長 大石了三

本年の JSPHCS/BMSC 海外研修派遣事業では、4 名の薬剤師を選考し、5/30 成田出発、5/31-6/4 Chicago で行われた American Society of Clinical Oncology (ASCO) 年會に参加し、6/5-6/6 ミシガン大学病院 (Ann Arbor) で研修、6/8 帰国した。

ASCO 年會参加者は3万人を超え、とくに米国以外からの参加者が徐々に増え続けており、日本からの発表も多かった。Chicago は Convention city と呼ばれるだけあり、広大な會議場、ホテルからのシャトルバスサービスなど、いろいろな面で受け入れ態勢が整えられていた。すべての分野の中から、今後の治療を大きく変えるような演題が Plenary session に選ばれるが、今年は子宮頸がん2題、甲状腺がん、乳がん、脳腫瘍各1題の演題であった。とくに、インドから発表された酢酸を用いた子宮頸がんの簡単なスクリーニングの成果は、インドだけでも子宮頸がんによる死亡を年間約7千人も救うことができることを示したもので、会場からの拍手が最も大きかった。ASCO 年會では分子標的薬を用いた治療の最新成果の発表が中心であるが、世界的ながん撲滅が目的であることを示した選択であった。

すべての演題は領域別に Scientific Program Committee によって格付けされたようなかたちで分類されている。Oral abstract session では1題15分で3題発表された後に discussant による解説・コメントが15分行われ、Poster discussion session では3時間のポスター展示の後に別の部屋で discussant による発表が4-7題につき15分行われるが、研究の背景、良い点、問題点、今後に向けての解説は、内容を理解するうえで非常に役に立つものであった。Plenary session の発表でさえも discussant によるコメントが必ず行われ、学会の質を維持して世界の治療をリードしていくために大変な努力が行われていることが感じられた。その他の演題は General poster session で行われるが、それに加えて、抄録だけがインターネットで見ることができるものがあり、もちろん reject される報告も多い。年會では、その他にも Education session などがあり、研修者は各自の専門領域を中心に盛りだくさんのプログラムに参加することができ、最先端の動きを実感することができたであろう。

ASCO 年會終了後、飛行機で1時間のミシガン大学の町 Ann Arbor に移動した。ミシガン大学病院はいくつかの建物に分かれているが、拡大を続けており、薬剤部門の職員は薬剤師、テクニシャン、事務職員など現在は総勢320人に達しているとのことであった。研修は2日間とも8時から4時までで、部長、副部长、薬剤師による説明・講義、院内ツアー、ラウンド同行であった。午前中2-3時間は2日間とも臨床薬剤師との病棟同行で、病棟でのチーム医療、臨床薬剤師の実際の活動状況を間近に見ることができる大変貴重なものであった。固形がんの化学療法は外来治療が中心になっており、今回は血液内科と骨髄移植の病棟で、臨床薬剤師に一人ずつ同行する形で行われた。

医療チームは医師、Physician assistant、看護師、薬剤師、栄養士、ソーシャルワーカーなどで、事前にそれぞれが患者の問題点を専門職の立場で把握しておき、病室前の廊下で電子カルテを見ながら討論し、診療方針を決定し、患者・家族への説明を行うというような手順であったが、それぞれの専門職が責任をもって討論に加わり、多職種がすべて同等であるように感じた。そのような話を Stevenson 薬剤部長にすると、長い年月がかかってここまで来た、日本での臨床薬剤師の活動はまだ歴史が浅いだろうと話された。日本でもチーム医療を推進する施策がとられており、薬剤師もこのような活動を行うようになりつつあるが、専門家としての圧倒的な知識と強い責任感のもとに活動を展開していけば、チームにおける立場もついてくるものと思う。

本研修の参加者は、今回の研修で専門薬剤師としての自らの知識をさらに高めることができたと同時に、医療チームにおける薬剤師の活躍に圧倒されて、強い意識の向上があったものと確信している。今後、がん専門薬剤師のリーダーとしてさらに磨きをかけるとともに多くの後輩薬剤師の育成に努力いただきたい。